非常に愛してくれる一人の婦人がありまして、此人は山とか川とか月とか凡て自然の景色に對して趣味を持て居るので、其感化をうけて、私は自然の景色を愛する情が大變養はれました。こういふ風に私が天然を深く愛するやうになりましたのは實に幸福であると思ひます。

それからもう一は私は極小さい時から書を讀むといふ事が大好で、十才から新聞の拾ひ讀をしました。いろ〳〵の雜誌も讀みはじめました。高等小學時代には新聞狂雜誌狂と言はれました。今でも讀書が私の一の大きな樂になりますのは此影響がよほどでございませう。

たのしかりし、かなしかりし私の幼時此邊で筆をおきませう。

幼時の家庭（一等）

東京　友彦

黄ばむだ木の葉がひら〳〵と舞ひ落ちて、夕風が冷やりと身に浸む頃になると、どれ程の樂しさに氣を奪はれて居ても、私は忽ち二十年前の昔に歸つて、丁度今頃であつたあの晩の、凄い〳〵恐ろしかつた、悲しい記憶を呼び起さずには居られませぬ。集散離合は定なく、さても一時は分限といはれた私の一家も、分散といふ浮世の風の吹き舞はしに母先づ去つて父後に逝き、家を繼いだ一番の兄もすぐ兩親の後を追つてからが、後は丸でちり〳〵ばら〳〵私は先づ他家へ貰はれて行く、私の姉……懷かしい私の姉は……左樣私よりは丁度八つの年上で、其時は丁度十九であつたのが、親類の叔母の家に行て、厄介になると云ふ悲慘の有樣。嗚

呼此悲慘の運命が更に次に來るべき一層悲慘の運命を姙んで一生忘るゝ事の出來ない深刻な印象を私の腦裏に銘するに至るべしとは、當時よもや誰も豫想する人はなかつたのでせう。

叔母は姉を自分の女の樣に慈しまれた事は、私でも覺へて居ます。けれども、當時は叔母の家もさう有り餘まる家計といふではないのであるし、夫に夫の手前を兼ねる處からして、一人でも口を減したいのであつた、姉も十分夫を承知して居る夫でとう〳〵田舍の或る人に嫁いで行たのは、矢つ張、今時で、秋風冷に、虫の音の漸く幽かになり行く頃であつた。

行つてから、彼れ是れ一年も經ちましたか＝叔母の家は相變らず究して居つた＝嫁して行つた翌年の秋の或日の午後、私は學校から歸て來た所が姉は田舍から一寸歸つたのだといつて、私の養家へ來て、養母としきりに何か話をして居る。一年振りで姉の顏を見た私の、其時の喜といふたらなかつた、何か言てくれるだらうと思つて、いきなり側へ走つて行つて「姉さん？」といつてチャンと座つて構へて居ても、「オー友さん？」といつて、一寸ふりむいて微笑した切り、又養母と話しかけた、勿論、其話は何の事だか、私には分らなかつたからして何だか手持無沙汰の氣がしたが矢つ張り、姉の側に座つて今日習つた、讀本のおさらへをして居ました。（一所に居つた時は、いつも其通りであつた）

四時頃になつて姉はもふ歸るといつて養母に挨拶をして居る。夫から私の方へ向いて、

「友さん、之からもねよくおつ母さんを大事にし

て、一心に御勉强なさいよ」

其時の言葉の調子が、今迄の姉の、丸くて温かなのとは全く違つて、何となく變に心に浸み渡る樣に感じた。見ると姉の目は涙……であつたのであらう、やゝうるんで、じーつと私を見て居た。

姉は去つた、格子窓から見送る私の顏を、冷やりと秋の夕風が一陣吹き去つた

＊　＊　＊　＊　＊　＊

夫から廿日も過ぎたであらうか、或日の夕方叔母の所から、急いで來いといふ使が來た。行つて見ると、七八人親類の誰れ彼れが集つて、鼎座になつて、極めて重々しい口調で、何かひそ〳〵と相談して居る、そして一番先に目に付いたのは、叔母の殆んど泣きくづれ相な樣子であつた。一見した許りで、此場の光景の只ならぬに私しの小さな胸は先づ激しい皷動を起した。

叔母は泣き腫らした目で私を見て「國子が急病だといつて來たからね」といつて、又うち伏して仕舞つた。この一言で、私の胸には更に新しい皷動が高まつた。

相談の結果は、つまり誰か一人迎へに行くといふ事になつて。叔母の夫と他に一人、すぐ其場から草鞋がけで出懸けた、が、一時間程たつと、二人は歸つて來た、道で向から駕で來た國子と遇つたのであるといふのだ。私は夫を聞いて、病氣でも、又姉さんに遇はれると思つてひそかに喜んで居ました。所が、何ぞ計らん、嗚呼何ぞ計らんです。姉はもう既に死んで歸つた。併も恐ろしい劍の下に伏して死んで歸つたのだといふ事であつた。この恐しい報知、この凄い報知、この酷たらし

い報知に接した、一同の驚愕愁歎、中にも叔母の仰天は今となつてはとても筆にも言葉にも述へられません。而して私は、嗚呼私は、今又一人の姉を此不慮の變で失つた私は、そッと次の間へ行ッて、疊に喰ひ付いて思ひ入り泣いたのであつた。

續いて恐ろしい、悲しい凄い光景が顯はれた。姉が送られて來たといふ、向ふの親類の家に、皆で揃つて行つたのは丁度夜の十時過ぎ。見ると佛壇の下に明滅たる蠟燭の光りの影に廿日前の面影其儘の我姉が、悄然たる姿で壁によりかゝつて居る。たゞ背ては花と紛ひし唇も今は堅く結んで物言はず、背ては我が惡戯を誡めんとて、やさしく睨み給ひし慈愛の眼は既に光を失つて居る、兩手は力なく膝の上に載せられ、兩足は其儘伸ばされて、

叔母は一眼見て「オヽ國子」といつた切り、兩の手で顏を覆ひ「ヨヽ」と泣き出した。この無殘の光景には、誰も彼も同じ樣に顏を背向けた。折しも颯と音して落ち散つた庭の梧葉一つ、

＊　＊　＊　＊　＊　＊

翌日の夕方悲しい〳〵葬らひが出た、とう〳〵我姉を永遠に奪ひ去つて仕舞ったのである。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

姉のこの悲境に死んだ譯は、當時私にはまだ分らなんだ、夫から大分年月が過ぎた後、次の樣な手紙の斷片を叔母から見せて貰つて、略ぼ其が分つた事でありつた。死ぬる十日程前に姉から送したのだといふ事で

……何事も〳〵姑樣の御氣に召す樣にとたゞ一すぢに夫のみ心がけ居り候へどもと

ても〳〵足らはぬ勝ちの私の事に候へばする事なす事すべて御氣に叶はずと見え日々責め折鑑せちるゝはまだしも今日此頃は三度の食事すら ろく〳〵下されず力と頼む我夫さへ……誰に語りてこの苦しみを分つべき便とてもなくたゞ〳〵一度づゝ洗濯の水くみにとて谷川へ參るこれのみがせめて一日中の樂しみに御座候……されどいか計り苦しとて一旦出でゝ人に嫁したる身のよしや苦しさのあまり此儘こゝに死すればとて何をか恨み候べき何も〳〵たゞ宿業とあきらめて覺悟致し居り候……。

評。句々皆涙、宛然是れ一篇の悲劇。

幼時の家庭（二等）

丹波　不忸軒人

私の家わ代々藩の劍術師範役を務め、今わ亡い父も維新までわ其役を務めたのでありまず、して私わ父の廿八歳、母の十九歳の時で、明治の七年に舊藩邸に產れました。其時家族わ祖父と兩親と三歳の姉とが有りました。何分にも武を以て立ッて來た家に女子が生れて皆な失望して居る處に、男子の私が生れたのですから、一家内わ勿論、親戚近隣にまで非常に悦んで貰うたそーです、當時父わ町の戸長を務め、傍ら邸内の道場で子弟に劍術を教授しました。此頃わ可なり世襲の財產もありました。私が五六歳の頃には父から種々の談をして、貰いましたが、殊に毎夜父に手枕をして貰いながら、楠公父子とか義貞とか義經とか那須の與市とか其他色々の人の忠勳談を聞き、之等の人に就いての教訓を受けましたが、之れが唯一の樂みで、いつも日の暮れになると寢床に入るのを待ち